
B.O.W. • Chronicles

MA-125 Hunter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・O・W・Chronicles

【Nコード】

N3852Q

【作者名】

MA-125 Hunter

【あらすじ】

私がこの世界に転生して、かなりの月日が経った。

今や私は二児の母。でも、世界は混沌の渦に飲まれていく…。

製薬企業連盟が創設したバイオテロ対策部隊『BSAA』が再編された今でも、紛争地域でB・O・Wが悪用されている。

そんな中、私はバイオテロの発生の連絡を受け、その地へ向かった…。

B・O・W 黙示録まさかの続編。 筆者の家庭内事情により打ち切りました

プロローグ・壊れ行く世界・（前書き）

> i 1 5 8 2 0 — 1 3 3 5 <

不慮の事故でこの世界のクリーチャーとして転生した私は今、
とある街に來ている。

家族と共に……。

そこはあまりにも危険で……恐ろしい所だった……。

プロローグ・壊れ行く世界・

アンブレラ崩壊から何年経っただろうか…。

私は今、荒れ果て、壊れ行く一つの街を見つめていた……。
きたときにはもう、手遅れだった…。

現状は最悪の事態……………

生存者はほぼ全員錯乱し、無差別に攻撃をしている。

ここはとても危険だ……。経験の少ない子供達には救助させられない。

> i 1 7 4 4 0 — 2 3 4 8 <

「お母さん、早く生き残ってる人を助けなきゃ」

「はやくいこうよお、みんなゾンビになっちゃうー！」

……………。

「お母さん、ねえ、お母さんー！」

「ここは危険すぎる……。あなた達はお父さんの所へ戻って、

ここの様子を伝えてきなさい。お母さんは生き残っている人を助けるから。」

「いやだ！おかあさんひとりでいっちゃやだ！ぼくもいくのー！」

「駄々こねないの、お母さんなら大丈夫だから！」

「いい？エレボス。このお仕事はとても危ないの。
今のあなただったら怪我だけじゃすまないわ。死ぬのは嫌でしょ？」

「おかあさんといっしょならこわくないもん！いっしょに行くんだもん！！」

エレボスと呼ばれた小さな漆黒のハンターは駄々をこねてじだんだを踏む。

「全くこの子は誰に似たのやら…ステュクス、頼むわよ。」

「はいはい。ほら、行くよ、エレボス！」

「いやーだー！！おかあさん！おかーさん！！」

> i 1 7 4 4 2 — 2 3 4 8 <

ステュクスと呼ばれた翡翠色の小型のハンターがエレボスを担いで街を後にする。

それを白金の鱗を持ったハンターが見守る。

子供たちの姿が見えなくなると、白金のハンターは街の中へと入っていった……。

プロローグ・壊れ行く世界 - (後書き)

B・O・W・黙示録まさかの続編。

主役はランスロット一家。

普段、敵として登場するクリーチャーの
織り成す家族愛溢れる(?)物語……。

人類の歴史は戦争の歴史 - 人類の営みの側面 - (前書き)

登場人物紹介：ランスロット一家

> i 1 7 3 3 0 — 2 3 4 8 <

ランスロット：前作に引き続き主人公。不慮の事故でB・O・W・ハンターに転生。

白銀の美しい鱗とカヤナイト（藍晶石）のように蒼い眼が美しい。基本温厚かつ誠実な性格であるが、強い正義感と鋭い洞察力を持ち、経験も豊富。

“白金の騎士”の二つ名を持つ。雌。現在、二児の母。

> i 1 7 3 2 9 — 2 3 4 8 <

ライオネル：1998年産のハンター。人間の時の知能や知識が何らかのきっかけで甦ったイレギュラー。ランスロットの夫。

気さくで陽気だが、正義感が強く、自分の命を無視した無鉄砲な行動を取ることがある。愛妻家だが、そのせいでランスロットの尻に敷かれている。親馬鹿。

> i 1 7 3 3 1 — 2 3 4 8 <

ステュクス：ギリシャ神話の地下の冥界を流れる大河の女神の名前を持つ

ランスロット家の長女。翡翠のような美しい鱗を持つ。

自然に周囲の信頼性を得ていく包容性があり、
母親に似てかなりの度胸の持ち主。弟のエレボスに手を焼いている。
大きさはハンターμより一回り小さい感じ。

> i 1 7 3 3 2 — 2 3 4 8 <

エレボス：ギリシャ神話の地下の暗黒の神の名前を持つ
ランスロット家の長男。黒曜石のような色をしている。
人間で言うと4歳児くらい。

かなり好奇心旺盛で、危険な事にもかまわず首を突っ込む。
人見知りの激しい一面もあり、自分の知らない人等が近付くと
ランスロットやライオネルの後ろに隠れる。幼児の典型的な例。
大きさは全長50cm程度。

人類の歴史は戦争の歴史 - 人類の営みの側面 -

白金のハンターこと、ランスロットは苦悶の表情を浮かべていた。街に入ったはいいが、生存者に接触できないのだ。

迂闊に近付けば命はない……。

はつきり言うと、ゾンビやB・O・Wより錯乱した生存者の方が数倍危険だ。

ここに立ち尽くしている訳にも行かず、錯乱していない生存者を探す為に

街を大まかに散策する事にした。だが、これも一苦労だった。

錯乱して危害を加えてくる人間サイコパスが意外にも多く、攻撃を避けるだけが精一杯だった。

何とかゾンビやサイコパスをかいくぐり、集合住宅街にたどり着いた。

ここになら生存者は居るかもしれない。

だが、殆どのアパートメントの中は誰も居ないか、ゾンビが居るだけだった。

その時、装甲車が、左手の方へ曲がっていくのを私は見た。気付かれないように、そっと、後をつける。

『BSAA』以外に派遣された軍なんて居たのか？

いや、あれは…武装警察だ。軍にしては装備が貧弱すぎる。

三人の男が出てきた。そして、アパートメントの一室に強行突破で進入する……

聞き耳を立てていると、こんな会話が聞こえてきた…。

「けっ…ここもしけてやがるぜ…」

「食糧もほとんどねえな………」

略奪だ…。こういう状況ではよく起こる事だが……
もしここに生存者が居たら…

彼等の命が危ない！

私は武装警察に気付かれぬよう、アパートメントの部屋を上階から見ていった。

だが、殆どの部屋は蛻の殻だった。

ここの生存者の救出は失敗か…そう、諦めかけた時だった。
目の前の部屋の鍵がかかっていた。

奥から生存者と思われる声が聞こえる。

「ゾンビか!?!」

「どうしよう…私達、ここで死ぬの?」

「俺、ちょっと見てくる…!」

「気を付ける!」

足音が近付いてくる…。

今、目の前の覗き穴を見た居るのだろうか…。足音が止まる。

「うわあ!?!化け物!?!」

ちよっ大声出すな!武装警察に見つかるぞ!!

ランスロット「化け物か…そう言われたのは久しぶりだな…」

『BSAA』のモんだ。あんたらを救助しに来た。」

そう言って、首から提げている『BSAA』のネームプレートを覗

き穴に押し付ける。
中から声が聞こえる。

「ランスロット……まさか、白金の騎士か!？」

やっとその言葉が聞けたよ……。私はこういう地域に赴くたびに白金の騎士と呼ばれる。

何故かって?そりゃあ……前作読めば解る。

ランスロット「やっと気付いたかい?早くここを出よう。

略奪者たちがすぐそこに居る。早くここから逃げなければ、殺される。」

そう彼等を説得し、やっと生存者を救出できた。

少しだけ、心が安らいだ……。
と、その時だった……。

「おい、その化け物!」

奴らだ。略奪者が来たのだ。

ランスロット「食料が欲しいのかい?卑しん坊。

生憎だが、救命道具しか持ってないぞ。」

「うるせえ!!さっさと荷物を渡せ!!」

私はとつさに生存者の女性が持っていたバッグを奪い、略奪者の一人の顔面目掛けて投げつける。

その隙を見て、両端の男どもの武器を奪い、そしてリーダーらしき男の首に爪を立てる。

ランスロット「もう馬鹿な遊びは終わりにしろ。

そうすればお前達をこの街から出してやる。」

武器を失った略奪者たちは何も答えない。

ランスロット「それともこの地獄で馬鹿やって自滅するか？」

私は苛立って、威圧的な発言をする。

こここの街に長居したくはないのだ。

生存者を見つけ、救出するのが私の仕事。錯乱した奴はどうにもならんが。

少しの間、沈黙が続く。

すると、略奪者のリーダーは怯えながらこう言った。

「わ、わかった。もうこんな事はしない。だから殺さないでくれ…」

ランスロット「殺しやしねえよ。」

この地獄から出たいなら、最初からそう言え。」

結果、この街から救出できた生存者は男性4人、女性3人の学生グループ、

略奪をしていた三人の武装警察だけだった。

私は装甲車で、生存者たちを街の外へと運び出し、

『B S A A』ベースキャンプに戻った。

私が装甲車から生存者を降ろすと、すぐさま衛生兵が彼等を包囲する。

ランスロット「後はこの衛生兵の指示に従って、

消毒やらワクチン投与やらを行ってくれ。

お前等の街で使われたのはウイルス兵器だからな……」

そういつて、私は一足先に消毒を済ませ、家族の元へ急ぐ。

エレボス「あ、おかしーん!!」

息子が嬉しそうに私の胸に飛びつく。

ステュクス「やれやれ、さっきの泣き虫はどこに行ったのよ……。」

年上の娘があきれた顔でエレボスを見る。

エレボス「だって、しんぱいだったんだもん！」

エレボスは私に抱かれながら膨れっ面をする。

あゝあ。本当に男の子は手間がかかるわ……。

ライオネル「ランスロット、よく無事だったなあ！」

夫のライオネルが涙を浮かべながら私を抱き寄せる。

ステュクス「ううわ……。人前で堂々と……」

ランスロット「離せ。娘が引いてるぞ。」

ライオネル「こっちがどれだけ心配したか……良かった、良かった……」

駄目だこりゃ。私は夫を足で引き剥がすと、自分達のテントの方へ

歩いていった。

ライオネル「おい、ランスロット！」

ランスロット「お前の心配事はテントに着いてから聞いてやるよ。

娘が不憫だし、第一私も恥ずかしいからな……。」

ステュクス「あはは、お父さんまたあんなこと言われてるw」

ライオネル「う、うるさいなあ！あんな地獄で無事で

いられるか心配でしょうがなかったんだ！」

ランスロット「今無事に帰ってきたからいいだろう！」

そこには異形の微笑ましい家族の姿があった。

だが、その家族の笑顔の裏には、恐ろしい悪夢の記憶があった…

人類の歴史は戦争の歴史・人類の営みの側面・（後書き）

小説第二作目、ようやく始まりました。

何かと突っ込みどころ多いと思います；

感想などがありましたらお願いします。

追憶・第二之完全適応者・（前書き）

数年前、ランスロット一家を襲ったとある悲劇：

ランスロットの体形が通常のハンターと大きく異なる理由でもあった
悲劇の真相…

今回はランスロットの一人語り

追憶 - 第二之完全適応者 -

数年ほど前の事だった……。
まだステュクスがエレボス程で、
エレボスがまだ生まれたての赤ん坊の時だった。
私はいつもの様に夫に子供を預け、任務を遂行していた。
今回もすぐに終わるだろう……。
この油断があつた惨劇を起こすこととなつた。
事件の起こつた場所は極寒の地だった。

> i 1 7 4 4 5 — 2 3 4 8 <

オーダーメイドで作られた防寒具を身に付けているとはいへ、
元々寒さに耐性のないハンターである私はかなりの苦戦を強いられ
ていた……。
自由の利かない体でこの事件の黒幕の元へ向かつたのが運の尽きだ
つた……。

氷点下の気候に体力を奪われ、感覚が鈍り始めていた……
その時、頭部にかかりの衝撃を受け、そのまま気を失ってしまった。
後ろに居たバンダースナッチの存在に気付いていなかったのだ……
気がついたときには、ソイツの実験室の中で束縛され、
“T - Veronica” ウィルスを投与されたのだ。

> i 1 7 4 4 4 — 2 3 4 8 <

その途端、意識が朦朧とし、体中を氷の刃で突き刺され、
バラバラにされるような激痛が体中をはしる。
それが治まったと思いきや、今度は内臓が焼け爛れ、
腐り落ちていく様な感覚と痛みが襲つた。

5分にも満たない出来事だったのだが、私にはまるで半日ほどに感じられた…

やがて、身体の痛みが消え去ると共に、私は意識を失った。

そして、目覚めた時、同僚たちが怯えた眼で此方を見つめていた。

一体何に怯えているのかと私が問いかけた時、

彼等から恐怖の色がなくなり、喜びの声があがった。

後から事情を聞いたが、それは信じ難い出来事だったと言う。

私が何日も帰ってこないため、援護として同僚である『BSAA』隊員が

駆けつけた所、その研究所はほぼ跡形もなくなり、

腹部を貫かれて死亡している黒幕と、

束縛具を引き千切り、苦痛に顔を歪めて暴れ、のた打ち回っている

私が出たと言うのだ。

その間、私の体が急激に変形したらしい…。

> i 1 7 4 4 3 — 2 3 4 8 <

人とほぼ変わらないシルエットになったかと思うと、

首回り、腰回り、肩の辺りの鱗が変化し、まるで鎧のような形状となり、

その鱗の先端は鋭利に、そして板金が沿った形で湾曲しており、上から下へと覆いかぶさっているように見えるという…。

そして家族の元へ帰った時、ステュクスが泣き付いて来て、ライオネルから始めてビンタをされた。

そして、泣きながら私を叱った。

“もう、こんな危険な事はしないでくれ”と…。
家族を残して死なないでくれと…。

> i 1 7 4 4 1 — 2 3 4 8 <

それから私は『BSAA』の任務は控えめにしている。
色々痛い思いをしたしね……………。
あれから私の身体の変化は、鱗の一部が鎧状になり、
より人に近い体形になった事、そして己の意思での血液の発火が出
来る様になった位だ。

追憶・第二之完全適応者・（後書き）

ランスロット一家を襲った数年前の悲劇。

この事件後から、

ランスロットは反則的とも言える強さを手に入れていた。

その為、今回の事件に派遣されたのである。

サバイバルゲームの開始・復活のアンブレラ・(前書き)

今、私達は『BSAA』本部にいる。

そして、かつて共にアンブレラの戦場を生き抜いた

ウェイン・パトリック、

アーサー・ラドフォード、

ルチア・ラドフォードと

会議中である。

え？あのアルビノの小さなハンターはどうしたかって？

ああ、バニラのことかい？天寿を全うしたよ……

今、二代目が居るんだけどね…。

ルチアから聞いた話だと、初代バニラが息を引き取ったと言う

記事が新聞に大きく出され、町の人々が悲しみに暮れたらしい。

ウェインも会社のマスコットがいなくなったのには慌てたようだ。

それでクローン生成の技法で二代目を造ったんだってさ…

初代バニラ

> i 1 7 4 4 6 — 2 3 4 8 <

二代目バニラ

> i 1 7 4 4 7 — 2 3 4 8 <

サバイバルゲームの開始・復活のアンブレラ・

彼等三人と会った時、全員が眼を丸くして驚いた。

私の姿が共に行動していた当時の姿とはまるで違うからだ。まあ、そりゃ驚くわな。

訳を話したら皆納得したけどね…。

彼等はカインドネス オブ ザ サン (Kindness of the Sun) 社の者だ。

この製薬会社はアンブレラのウイルス兵器のワクチンなどを専門に開発し、

様々な医療器具の発明を手がけているかなりの大手企業である。

それに、『BSAA』を援助している企業の一つだ。

今回はアンブレラ社復活の兆しが見られるとこのことで、彼等と臨時緊急会議を行っている。

新しいB・O・Wの情報やその実験の犠牲になりそうな都市、被害の予想シミュレーションなどかなり貴重な情報が得られた。

ランスロット「それにしても…こんな機密情報をどうやって……」

ルチア「バニラがハッキングしたの。」

ライオネル・ランスロット「はあ!？」

アーサー「二代目のバニラには

コンピュータハッキング装置を胸に装着させているんだ」

よく見ると、二代目バニラの胸には紅い宝石のような丸い機械が装着されている。

当の本人は呑気にルチアの膝の上で骨型の犬用ガムを噛んでいる。

ウェイン「この子、かなり記憶力が良いもんでさあ…」

うちのメインコンピューターのマスターコードを暗記し
ちまったんだ」

二代目は喋れないだけで私達と同等か、それ以上の知能があるらしい。

それで試しに「H・C・F」のコンピューターにハッキングさせたところ、

最重要機密情報までコピーガード破りしてコピーし、複製したと言
うのだ。

しかも証拠隠滅までしたらしい……。

しかし「H・C・F」とか危険すぎるだろう！

そう突っ込もうとした時、子供たちがバナラと戯れ始めた。

その様子を見てるうちに、そんな突っ込みなんてなんかどうでもよ
くなった。

私達はすでに危険すぎる仕事をしているのだから、人のことは言え
ないしね…。

そして、一番重要視される情報を整理した結果、このようなデータ
が出来た。

「タルタロス計画」

アメリカ イリノイ州 セントルイスにて、実験開始。

開発中 B・O・W の投入。

特殊部隊及び『BSAA』隊員との戦闘データ回収、
イレギュラーミュータントの情報調達などだ。

この後、すぐに緊急会議が開かれ、対応策を考える事となった…。

サバイバルゲームの開始・復活のアンブレラ・（後書き）

このあとから一家は大変な事件に巻き込まれていきます…

感想などがありましたらよろしくお願いします

事件の序章・ランスロットの疑問・（前書き）

今回は挿絵はありません。

旧友の活動により、恐るべきアンブレラの計画を知った
BSAAとランスロット一家。
今宵、彼等は解決策を求めるが…

事件の序章・ランスロットの疑問・

今、私達はBSAA本部の会議室にいる。ウェイン等が手に入れた情報、“タルタロス計画”の対応、及び計画の進行を以下に早く止めるかという議題が中心に進められている。

だが、私は疑問を抱いていた。

今までの事件は殆どが紛争地域であったが、この計画では紛争地域ではなく、

治安の悪い犯罪都市がターゲットとなっている点である。

確かにセントルイスは犯罪発生率がかなり高く、かなり危険な都市である。

ミシシッピ川をはさんで対岸に位置するイーストセントルイスはもっと危険だが…

私はセントルイスについて調べてみた。その結果、

ラクーンシティのアンブレラ事件前から

セントルイスにはアンブレラの支社が多数あった。

そのお陰でセントルイスは飛躍的に発展した企業城下町となっていた。

だが、あの事件が起こってから、セントルイスは徐々に治安が悪化していった…

と言う事が判明した。

ラクーンシティ壊滅後、アンブレラ社は

「ラクーンシティ壊滅の原因はアンブレラによるもの」であることを一般に周知されぬように偽造工作を繰り返す一方、
なおも生物兵器の実験を続け、研究所の事故や敵対組織の襲撃でバイオハザードを発生させるに到り、第二第三のラクーンシティを作っていくこととなった。

隆盛を誇ったアンブレラであったが、
真実を知った事件生存者や反対組織の諸活動によって徐々に衰退。
現在、再起のための研究開発が行われているらしい。
それが“タルタロス計画”だ。

セントルイスは元々アンブレラの支社が数多くある為、
この計画を実行するには好都合なのだろう。

そしてイレギュラーミュータントの発生確率もかなり高くなる。
戦闘データの回収にはもってこいって訳だ…

前述した私の考えが当たっているとしたら、
早急にこの計画を潰さないと、大惨事は免れない。
最悪の場合、ウィルスの影響で近代文明のほとんどが壊滅状態となってしまう。

ランスロット「ライオネル…ちょっといいか？」

私は隣にいた夫、ライオネルに前述の推理を話してみた。
するとその話を聞いた途端、

ライオネル「おい、それ…メチャクチャやべえだろうが!？」

そういつて立ち上がり、私の推理をそっくりそのまま

会議室に集まっている人達に言って聞かせた。
そして…会議室は騒然となった。
皆口々にああするべきだ。こうするべきだ。と意見を出す
が、ならばその問題点はどうする、だの…無茶なこと言うな。だの
反対意見も飛び交って……

“ 会議は踊る。されど進まず。 ”

ランスロット「お前ら黙れ！！！」

一瞬の沈黙……

ランスロット「問題を解決する会議でさらに問題を増やしてどつす
るんだ！！」

落ち着いて話し合うべきだろうが！！

意見したい奴は明確なデータを提示しろ！！！！」

会議室は静まり返った……

この後、何とかその場は治まったが、問題はこれからだ…

事件の序章・ランスロットの疑問・（後書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3852q/>

B.O.W.・Chronicles

2011年11月12日19時24分発行